

「暮らし続けたい環境」に理解

資源ごみ分別 クイズで学ぶ

ライフドアすわ コミュニティカフェ

諏訪市地域医療・介護連携推進センター（ライフドアすわ）と市社会福祉協議会は25日、「暮らし続けたい環境って？」と題したセミナーを市総合福祉センターで開いた。地域支え合いのまちづくりを主眼とする「コミュニティカフェ」の3回目で、市民や関係者約30人が参加した。ごみの分別に関する講演やごみ分別の疑似体験を通じ、「環境のためにできること」として資源分別の重要性に理解を深めた。（丸山智永）

市は4月からレジ袋や菓子袋といったプラスチック（軟質プラ）の回収を始めていて、従来「燃やすごみ」として排出されていた軟質プラを「その他プラ」として資源化することでごみの減量を図っている。セミナーではまず、将来にわたって「暮らし続けたい環境」を考え、そのためにできることとして資源の分別に焦点を当てた。

市環境課の細川光洋さんが講師を務め、市内の燃やすごみの現状を紹介した。2023年度に1万1662トだった総量が24年度には1万1469トに減っていて、資源化が進んでいる



カードを使ってごみ分別の疑似体験をする参加者

と説明。ごみの焼却は二酸化炭素が排出され、焼却灰の処分も必要となるため「ごみが増えると費用や環境への負担も増える」と指摘し資源化の重要性を訴えた。

分別体験はカードを使ったクイズ形式で行った。参加者は、使い終わった修正テープやボックスティッシュなどの写真を「複数の素材が使われていて迷ってしまう」「裏が銀色だからプラかな」と相談しながら分類。細川さんは実物を手に「ボックスティッシュはその他の紙へ。できればビニールの部分は剥がして」「包装類は食べ物の汚れを落として」などと答え合わせと解説をした。

ライフドアすわによる寸劇もあり「分別に困っている人がいたらどうする？」と投げ掛け、「優しい声掛けが地域に広がるといいですね」と期待した。このほか、高齢者のごみ出しが地域で課題になっているとして、市の支援事業の説明もあった。